




博士論文審査及び最終試験の結果の要旨

氏 名	池田 公平
論文題目	回復期リハビリテーション病棟におけるセラピストのための多職種連携実践尺度開発と実証研究
論文審査員	<div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div>主 査 杉山みち子</div> <div></div> </div> <div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div>副 査 谷口 千絵</div> <div></div> </div> <div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div>副 査 米津 亮</div> <div></div> </div>
<p>【論文審査の結果の要旨】</p> <p>本研究は、回復期リハビリテーション病棟（以下、回復期病棟）入院患者における Activity of Daily Living (ADL) 改善及び自宅退院の推進に寄与する観点から、セラピストのための多職種連携実践尺度の開発及びその効果の実証を行うことを目的としたものである。</p> <p>研究 1, 2 においては、医学中央雑誌及び MEDLINE による文献研究及び回復期病棟に勤務するセラピスト (PT, OT 及び ST) を対象としたインタビュー調査から構成概念の検討及び質問項目が作成された。その結果、7つの大カテゴリー、2つの中カテゴリー、41 の小カテゴリーが生成された。大カテゴリーは、【チームの一員として機能する】【カンファレンスを活用する】【連携しつつ専門性を発揮する】【コミュニケーションの機会を作る】【コミュニケーションをとる相手に配慮する】【患者に関する情報を共有する】【支援方法の統一と役割分担をする】とされた。</p> <p>研究 3 においては、研究 1, 2 の結果から作成された自記式質問調査票について、因子構造の検討及び質問項目の信頼性検証が行われた。回復期病棟のセラピスト 70 名を対象とし、当該調査票を用いてデータの収集が行われ、探索的因子分析の結果、回復期病棟における ADL 改善と自宅退院促進に対する多職種連携実践との関連が強い 5 因子 28 項目が抽出された。5 因子は、【チームを意識した行動】【意見交換】【臨機応変な対応】【患者の全体像の共有】【支援方法の調整】とされ、内的一貫性、識別力、因子構造に一定の信頼性と妥当性が示されたことから、本尺度は、セラピスト連携実践評価尺度 (Therapist Collaborative Practice Scale; TCPS) とされた。</p> <p>研究 4 においては、TCPS の信頼性と妥当性の検証が行われた。回復期病棟のセラピストを対象とし、信頼性の検証は、同一対象者が TCPS を 2 回使用した結果に対し、</p>	

Interaclass Correlation Coefficients(ICC)が行われた。妥当性の検証は、TCPS と既存の Team Approach Assessment Scale(TAAS)及び IPW コンピテンシー自己評価尺度大塚モデル改定版 24 項目(OIPCS-R24)との相関性が検証された。その結果、TCPS と ICC との相関関係は $0.95(95\%CI: 0.88-0.98)(p<0.01)$ 、TAAS との相関関係は $0.58(p<0.01)$ 、OIPCS-R24 とは $0.67(p<0.01)$ であった。一方、ADL 改善に関する質問項目は、既存の尺度との関連が低く、TCPS に特有であった。

以上の研究結果から、TCPS は、回復期病棟のセラピストによる入院患者の ADL 改善や自宅退院促進に対する多職種連携実践の評価に特化した尺度として開発され、信頼性、妥当性が確認された。

そこで、研究 5 においては、TCPS を用いての回復期病棟におけるセラピストによる多職種連携実践と ADL 改善や転帰等のアウトカムとの関連が後ろ向きコホート研究によって実証研究された。対象は回復期病棟のセラピストを対象とし、対象者の TCPS 得点の中央値により 2 群に区分した (各群 108 名)、アウトカムは FIM 効率、FIM effectiveness, 入院期間、転帰とし、傾向スコアによる交絡因子の調整が行われた。TCPS が中央値以上のセラピストの担当患者群の方が FIM 改善は良好であり、かつ、自宅退院の割合が多いことが示された。

本研究により、回復期病棟のセラピストを対象とした妥当性、信頼性が検証された多職種連携実践尺度 TCPS が初めて開発され、さらに、実証研究によって、セラピストの TCPS 得点は、担当入院患者の ADL 改善と自宅退院促進との関連が示されたことは、今後の回復期リハビリテーションにおけるアウトカムに寄与する多職種連携の推進やその質の向上に寄与するものである。さらに、本研究による知見は、リハビリテーション領域に留まらず、多職種連携とアウトカムに関する保健福祉学上の研究を伸展させるものであり、博士学位論文としての水準を満たしていると判定できる。

【最終試験の結果の要旨】

令和 3 年 1 月 19 日 (火) に、博士学位論文の最終試験を実施した。提出された博士学位論文に沿ったプレゼンテーションと口頭試問を行った。審査員から、「本研究の新規性や保健福祉学上の意義」「5 つの研究における結果とその解釈」に関する試問があり、質疑応答を行った。質疑応答を通して、本研究結果と意義の理解が十分に得られていることを確認するに至り、審査員全員一致で最終試験を『合格』と判定した。